

〈特集：第25回年次学術集会から〉

序文：第25回年次学術集会 ～特別講演・教育講演1、2、3から～

下村 弘治

25th Annual Meeting, featuring special lecture and three educational seminars

Meeting Chairman, Hiroji Shimomura

Summary The 25th Annual Meeting of The Society of Analytical Bio-Science featured a special program focusing on "The gap between bench and bedside."

The program included a special lecture entitled, "Information clinicians should know about the latest medical and pharmaceutical products" and three educational seminars: 1) "The biochemical monitoring of non-invasive samples (e.g., lacrimal fluid and biological gas)," 2) "The present and future status of doping inspections," and 3) "Cancer biomarker development via proteome analyses."

The entire program represents a new developmental direction for The Society of Analytical Bio-Science, which we hope will serve you in your future research.

Key words: The 25th annual meeting, The Society of Analytical Bio-Science, The gap between bench and bedside.

生物試料分析科学会は「生物試料の分析法」の発展に大いに貢献してきたが、今後さらなる発展のために新たな方向性をみきわめる必要がある。第25回年次学術集会では生物試料分析科学会の研究の場である「基礎と臨床の狭間」にまだ手が付けられていない研究領域に眼を向けてみた。今回の特別講演と教育講演は、いずれも新しい研究分野として今後注目したい内容である。

特別講演は「医療人に知ってほしい最新医薬品の情報」と題し、芝紀代子先生（文京学院大学名誉教授）にご講演をいただいた。「OTC検

査薬の拡大の方向性や検体測定室の開設と問題点」は新たな分野として見逃せない。また、ジェネリック医薬品は臨床検査技師として知っておきたい知識である。

教育講演1は「非侵襲サンプル（涙液、生体ガス）の生化学モニタリング」と題し、三林浩二先生（東京医科歯科大学生体工学研究所 教授）にご講演をいただいた。日本が直面する高齢化社会において、非侵襲的に生体情報を得る技術は、慢性疾患患者のみならず健康人においても、健康を意識する手段として有用なものと思われる。本学会の新たな研究分野として注目

文京学院大学大学院 保健医療科学研究科
〒113-0023 東京都中央区向丘2-4-1

The Clinical Laboratory Medicine Department, Bunkyo Gakuin University.
2-4-1 Mukogaoka, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0023, Japan

したい。

教育講演2は「ドーピング検査の現状と将来」と題し、鈴木秀典先生（日本医科大学大学院医学研究科 教授）にご講演をいただいた。近年、ドーピングは世界的な関心事項となっており、多様な物質の検出に対応して、近年分析法が進歩してきている。ドーピング検査は尿、血液を用いた分析であり、その分析技術の進歩に興味を持たれる。

教育講演3は「プロテオーム解析によるがんバイオマーカー開発」と題し、近藤格先生（国立がん研究センター研究所 分野長）にご講演をいただいた。近藤先生は腫瘍組織を用い、プ

ロテオーム解析によってバイオマーカーを開発してきた。プロテオーム解析の分野では、特にがんのバイオマーカーの開発が注目される。しかし、診断や治療に役立っているバイオマーカーは少ないのが現状である。今後は遺伝子転写産物(mRNA)の解析データも活用することで、新たなバイオマーカー開発が期待される。

今回の特別企画は、「基礎と臨床の狭間」に視点を向けて取り上げた内容であるが、いずれも生物試料分析科学会の新たな展開の方向性を示すものであり、皆さんの今後の研究の一助になれば幸いである。